早期発見にがん検診活用を

がん社会を診る

中川 恵一

オリンパスが全国の40～60代の男女計1万4100人を対象に「胃・大腸がん検診と内視鏡検査に関する意識調査」を実施し、結果を先月公表しました。国が推奨する5がん（胃がん、大腸がんの他、肺がん、乳がん、子宮頸（けい）がん）検診の受診状況や受診・未受診の理由、内視鏡検査への意識などについて回答を得ました。

がんについて不安を感じると答えた人は全体の7割を超えていました。日本人男性の3人に2人、女性でも半数が生涯にがんを経験しますから、当然の結果でしょう。

一方で、不安を感じる人に限っても、5がん検診すべてにおいて受診率は5割に届かず、大腸がん、肺がんは3割程度にとどまりました。

胃がん、大腸がん検診を受けなかった理由は「特に自覚症状もないから」がともに最多でしたが、全く誤解です。がん検診は症状がない人の早期がんを見つけるためのものだからです。

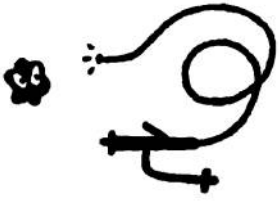

イラスト　中村　久美

私たちの体内では毎日多数のがん細胞が発生していますが、免疫細胞がこれを退治してくれています。しかし、がん細胞はもともと自分の細胞ですから、免疫細胞にとっては「異物」と認識しにくい、やっかいな存在です。

「免疫監視機構」の網の目を潜りぬけたがん細胞は10～20年といった長い時間をかけて、検査で分かる1センチメートル大まで成長します。多くの場合、早期がんは2センチメートル位までを指しますから、1～2センチメートルの間に発見することが重要です。

1センチメートルのがんが2センチメートルの大きさになるのに要する時間は1～2年。この大きさでは症状は出ませんから、がんの種類に応じて、1年あるいは2年に1度がん検診を受ける必要があります。

国は大腸がんで40歳以上で毎年、胃がんは50歳以上で2年に1回の受診をそれぞれ推奨しています。胃がんや大腸がんを早期に発見できれば、90パーセント以上が治癒可能ですが、これを認識している人は3割を下回りました。

がん検診の受診率を加入する医療保険別にみると、公務員らが加入する共済組合が最も高く、次いで大企業が設立する健康保険組合、中小企業が加入する協会けんぽと続き、自営業者の多くが加入する国民健康保険が最も低くなっていました。正しい知識を持つことで、社会的格差を埋めてほしいと願います。

大腸内視鏡が恥ずかしいからと、精密検査を受けない人も多いようです。しかし、大腸内視鏡検査の経験者の回答は「意外と恥ずかしくなかった」が39パーセントで、「恥ずかしかった」（27パーセント）を上回りました。先入観を捨てて、まずは一度受けてみることが大切だと思います。

（東京大学特任教授）